



ロータリーは機会の扉を開く
2020-21 年度 RI テーマ
Rotary Opens Opportunities
国際ロータリー会長
ホルガー・クナーウ

Weekly Bulletin

30th anniversary

藤枝南ロータリークラブ 会報

例 会：毎週金曜日
会 場：小杉苑 藤枝市青木 2-35-30
T E L：054-641-3321

事務局：藤枝商工会議所内 藤枝市藤枝 4-7-16
T E L：054-646-3919 F A X：054-643-2000
E-mail：jimukyoku@fujieda-south-rotary.jp

2020-21 年度
会長：松浦正秋 副会長：竹田敏和 幹事：鈴木健夫 副幹事：望月 誠

例 会 第 1404 回：通常例会/小杉苑

ソング それでこそロータリー、風：ソングリーダー 数野晴紀君

原点回帰

■ 会長挨拶

松浦正秋君



昨日、東日本大震災発生から 10 年が経ちました。多くの新聞やテレビなどが特集を組んでいました。改めてこの震災の影響の大きさを感じました。政府は 30 兆円を超える資金を投じて復興に取り組んできました。しかし、福島第 1 原発の廃炉への道筋ははっきりせず、多くの人々が生まれた土地に帰ることが出来ずにいます。また、行方のわからない人がたくさんいるのも現実です。

南海トラフ地震の危険と向き合う地域に住む者として、10 年前の震災は決して他人事で済ませることはできません。どのようにして命を守り、経済的損失を最小限に抑え、事業を再開するための計画を準備しておくことが重要であると考えます。先人達の経験を活かしていかなければなりません。

今月に入って新型コロナウイルスへのワクチン投与が始まりました。接種のマニュアルには 1 瓶で 5 回の接種が可能となっているようです。注射器の形状を工夫し 6 回の接種を可能にしたとの報道がありました。また、インシュリン注射用の針の短い注射器を使って 7 回の接種を行った病院の報道もありました。物事に取り組み進めていく上で、指示されたことにもう一工夫加えて、更に良い方法を模索してことが重要であると感じました。日頃何げなく行なっていることを改めて見直したいと思いました。

■ 幹事報告

鈴木健夫君

英字 ROTARY を回覧いたします。

■ 出席報告

漆畑雄一郎君

本日のホームクラブ出席者	前回の補正出席者
40 / 51 78.43%	47 / 51 92.15%

(1) 欠席者 (事前連絡とメイクアップをどうぞ)

○江崎君 ○大村君 ○笠原君 ○加藤君 ○瀧脇君
○古川君 ○村松章隆君 ○渡邊博君
阿井君 川口君 佐野裕君

(1) メイクアップ者

桑原茂君 瀧脇一啓君 村松章隆君 渡邊博文君
○古川君 ○村松章隆君 ○渡邊博君

食事準備数	食事提供数	残	累計残
44	42	2	29

パーフェクト例会数 🌟🌟🌟🌟🌟🌟🌟🌟🌟
🌟🌟

欠席連絡は、当日朝 10 時前までにお願いします

■ スマイルBOX

漆畑雄一郎君

- ・結婚記念日のプレゼントありがとうございました。来年は五十年を迎えます。小林正敏君
- ・妻の誕生日プレゼント、ありがとうございました。樽井勉君

- ・誕生日プレゼントありがとうございました。
64才になりました。来年は前期高齢者となります。 植田裕明君
- ・妻への誕生日プレゼントありがとうございました。心から感謝いたします。 森竹正晃君
- ・妻の誕生日プレゼントありがとうございました。 大村和宏君

スマイル累計額 549,000円

■ 会員卓話

内山淑夫君



昨年の夏、今では夢幻のごとく感じる一ヶ月半の航海を振り返ってみる。あの頃はコロナに対して初々しいと言いますか、まだコロナの见えない恐怖から、他県のニンゲンを警戒したり、拒絶したりと世間が右往左往しているときでした。あの頃に比べると、最近の若い人は居酒屋でのテレビインタビューに、感染しても死なないんでしょと平気で言う始末です。いつかの事態が復旧し、自由に往来できるようになれば、再度チャレンジして、沖縄経由台湾行きの航海をしたいと夢想する日々です。

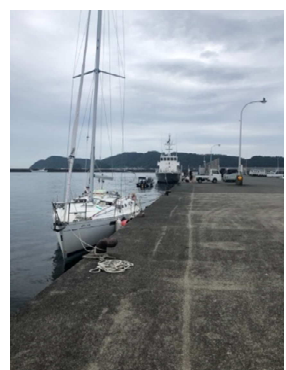
今回は、福田港からの矢湾の渡鹿野島に這々の体で逃げ込んだところで時間となってしまいました。居酒屋で言えば、のれんに手をかけただけで帰っちゃったようなものです。今回は三重県から和歌山県を経て徳島経由で瀬戸内海の写真集となります。熊野灘から潮岬を超えて鳴門海峡、小豆島、しまなみ海道と忘れられない思い出ばかりです。

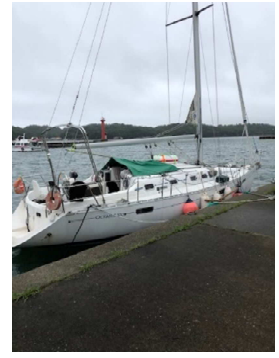
今回の航海は外洋を一気に走るのでは無く、各地を転々と楽しみながら行こうというものです。主に係留するのは漁港になります。マリナーはほとんど無いからです。漁港はどうしても漁船が優先されますし、いつでも誰でも係留できるスペースは無いのが通常です。ですから事前にいろいろな航海記や手記を見て入れる港、入れない港を選別し、ある程度の計画を立てて臨むこととなります。それでも行ってみると事前に調べていた係留予定のポンツーンが台風で無くなっていたり、駐められる岸壁が他の船で満杯だったり、ポンツーンの管理が市から県に移り使用停止になってい

たり、ぎゃっと叫びたくなるようなことが次々と起こります。夕方ノコノコ着いてみたら駐められないからと次の港に行くのは事実上不可能です。知らない港を夕方に出て、暗いなかを知らない港に入港するくらいなら、朝まで沖でぐるぐる回っていた方が安心です。じゃあどうするかというと、港内の空きスペースにアンカリングしたり、強引に他の船に横抱きさせていただく(もちろんお断りをしてです)、まわりの船に涙くらい見せる演技が必要です。

可能であれば海の駅に登録している民間のマリーナに係留し、船も乗員も骨休めが必要です。水や軽油や新鮮な食料を積み込んだり、シャワー・コインランドリー・温かい食事を楽しんだり、また蒸し暑い夜には扇風機の風の中で休みたいものです。水も電気も無い漁港だけを転々としていくのは空調付きの船でないとつらいものです。空調付きなら真夏や真冬でもしのげるかもしれませんが。

ともあれ、船での生活が一ヶ月半を超えてくると陸での生活がなつかしく、陸上の生活が如何に快適だったかと痛感します。しかしながらこの不便さを超えてもまた行きたくなるのは何故なのか、私自身にもよくわからない謎です。もしかしたら清水港近くで過ごした幼少期に戻りたいという衝動かもしれないなあとぼんやり思います。いつの日かまた海を越えて行きたい。知らない人となったり、知らない路地をあるいたり、知らない料理を食べてみたい。たとえそれが現実逃避であろうが空想癖であろうが。





■ 今週の一言

佐野芳正君



妻は小学生の時からインドに行きたくて、10円の貯金をしていました。新婚旅行は、もちろんインドです。街を歩いている

と、艶のある黒糖が並べてありました。これをくださいと言って、店員が手を差し伸べるとハエが一斉に飛び、鮮やかな黄色のパイナップルのお菓子が現れました。暑い国ですから日影を求めます。わずかな電柱の影に列になって十数人が並んでいます。しばらくして同じ場所を通ると、皆日影に合わせて移動していました。人間時計です。街を歩く人々は、白い布に生活用品を包み棒にさしています。これが全財産です。ガンジス川で葬儀も見ました。人間の原点をみる旅でした。今はどうなっているのか、妻の議員の勤めが終わったらインドに行く予定です。

例会プログラム

例会日	クラブ行事	摘要
3/26(金) 第1406回	会員卓話	小杉苑
4/2(金) 第1407回	PETS 報告	理事会
4/16(金) 第1408回	会員卓話	小杉苑
4/23(金) 第1409回	会員卓話	小杉苑

